

「働くなら社会の役に立つ仕事を」。女性たちの中でこんな社会志向が高まっている。中でも注目を集めているのが、国際貢献の仕事。国連をはじめとする公的機関やNGO（非政府機関）には就職希望の女性が殺到している。ただし、彼女たちの心の内をのぞいてみると、単に社会貢献の理想だけではなささまざまな事情があるようだ。

高まる女性の社会派志向

職員採用に応募殺到

五月下旬、国際協力事業団（JICA）が開いた事業説明のセミナーに約100人の学生が詰め掛けた関係者驚愕させた。定員は三百人。急ぎよ、回に分けて実施したが、その八割を女子学生が占めた。七月に採用試験を実施するが、資料請求の申し込みはすでに五万件を突破。昨年実施した社会採用試験でも、三十人の募集に千四百人の応募があり、競争率は約四十五倍にも達する超人氣のたつた。

四月中旬、国連が職員採用のために開いた講演会にも約七百人の女子学生が集まって話題を呼んだ。国際開発ジャーナリストは五月に「国際協力就職ガイド」を初めて出版したが、「早くも売り切れる書店が精出して」と編集部長の和泉隆一氏。「国際協力に貢献できる仕事をしたい」と望む人が増えているが、一部の機関を除くと、まだ知名度が低い。途上国援助に関係する職場を知りたいという「ニーズが高い」と説明する。NGOでも就職希望者が増えている。NGO活動推進センターは国際協力を行う市民団体の七割近くは女性だ。同センター

開放しているが、利用者が急増している。月一度の就職相談室も、十人弱の定員のため最近は何回断る人が出る状況という。七月近くは女性だ。同センター

国際貢献職に新天地

聞広告を出したところ、問い合わせが二百八十件に上った。

男女平等の場求め

なぜ、女性たちは「国際貢献」を志すのか。昨年八月、財団法人国際開発センターに入社した清水千夏さん（25）は「語学を生かして、途上国に関係する仕事をしたかった」と話す。大手情報関連会社に就職し、二年余りを過ごした後の転職だ。大学卒業時はバブル景気の追い



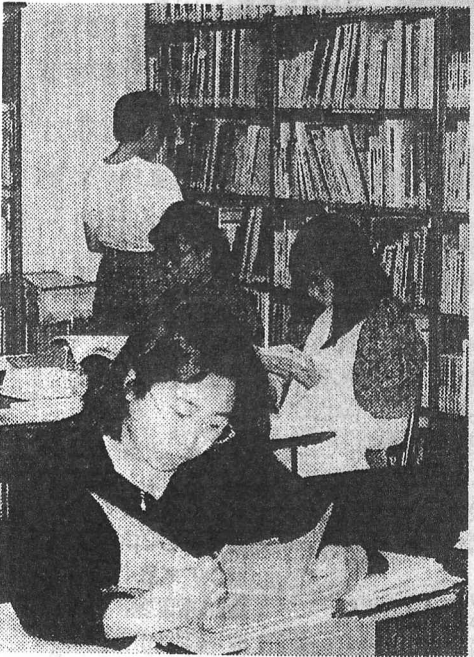
た。会社の利潤追求のために働くのはむなしとも感じ始め、転職を決意した。現在、収入はかつての職場の約半分。しかし、「自分の興味を満たされるという充実感は何にも代えられない」と清水さんは「一人のためになる仕事をしたい」という満足感も支えになるという。

タント。先が見え過ぎる世界に限界を感じていた。ものがいを第一条件に転職活動をして出合ったのが今の仕事。途上国の子供を援助するため窓口にたり、援助者にきめ細かいサービスを提供するのが阪口さんの業務だ。「努力すれば仕事の幅が広がられる。男女の差という組織上の重しもなくなった」と表情も明るい。

現状の理解が大切 日本国際ボランティアセンター事務局長の林達雄氏は「民間企業が就職して二、三年目の女性が応募する例が増えているが、仕事の不満から新天地を求め人や、国際という言葉へのあこがれや思い込みだけで、途上国の現状を理解していないケースも少なくない」と話す。国際協力も仕事となれば正義感だけでは成り立たない。「開発、保健衛生などの広範な基礎知識に加えて、情報収集力、洞察力、交渉力などの能力が要求される」（湯本氏）。一方で、歴史の浅い日本のNGOは、未成熟で活動資金や組織面で多くの課題を抱えている。「単純な理想だけでは立ち行かないのも事実」（同氏）だ。

イメージ先行で落胆も

やりがい第一に



NGOの資料室で熱心に資料を調べる女性たち（東京・神田錦町のNGO活動推進センターで）

の企業は男性中心の精神構造を委ねるには至らず、女性が不満を抱えている。彼女たちは、男女の区別なく仕事を任せられ、自由に意見を言い合える職場を求めている。政府系の援助機関は、公務員並みの安定した待遇で、それも理由の一つだ。不況下で一般企業の垣根が男性以上に高い女性たちが押し寄せたのも無理はない。一方、経済基盤の弱いNGOは、女性だからこそ入りやすいという側面もある。「給与は一般企業の半分が良くて七割。社会保険もなく、退職金も保証されない。説明を聞いて飛び込める男性は多くない」とNGO活動推進センター事務局次長の湯本浩之氏は指摘する。

「仕事は海外渡航者の航空券の手配やスケジュール管理、資料整理など地味な部分が多い。最近ではOG訪問をよく受けるが、国際という言葉のイメージのギャップに落胆する人もいて」と打ち明ける。国際貢献活動への関心の高まりは、だれもが歓迎するところ。だからといって周囲に流されるのでなく、その内容をきちんと理解することが必要とされている。